國學院大學學術情報リポジトリ

紹介

野村敬子・霧林宏道編著『間中一代さんの栃木語り』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯倉, 義之, Ikura, Yoshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000194

〔紹介〕

野村敬子・霧林宏道編著 『間中一代さんの栃木語り』

飯倉義之

本書『間中一代さんの栃木語り』（以下、『栃木語り』）は語り活動を行う栃木市の語り手、間中一代さんの語りを収録した昔話資料集である。間中さんは昭和三四年栃木市生まれで、語り手の中では若手である。「現代にも昔話の語り手がいたんだ」——これが今日を生きる多くの人の実感ではないだろうか。いささか遠回りになるが、研究の歴史を整理しておきたい。

昔話を聴き集めて研究する営みは、昭和初期に日本民俗学の祖・柳田國男によって整えられた。柳田は「昔話」を口承文芸の一領域、具体的には「発端句や結末句などの語りの形式を備

え、現実の時間や場所とは結び付けられず、空想的な内容を持つ、民間で伝承されてきた説話」を指す学術用語として定義し、民俗学に関心のある地方の研究者にその収集・報告を働きかけた。昔話の収集・報告はやりがいのある面白い事業として、多くの地方在住の研究者や、柳田の周囲の若い学徒たちが精力を傾けた。

昔話研究は戦時中には停滞したが、戦後に息を吹き返す。一九五〇年代の、民衆の口伝えの説話を階級闘争に活かそうとした左派文化人による「民話運動」や、昭和三〇年代の国文学研

究と昔話研究との連携は昔話の採集報告を活気づけ、地方在住の昔話研究者——たとえば新潟の水沢謙一・宮城の佐々木徳夫・山形の武田正・岡山の立石憲利ら——による精力的な昔話の採集・報告がなされた。また民俗学が大学の講義科目となり、アカデミズム化されていく過程で、大学や高校で組織された民俗学研究会・昔話研究会が組織的な聴き取りを始める。その成果もまた報告書にまとめられ、昔話研究の隆盛をもたらした。

そして一九七〇年代、デイスカバー・ジャパン・キャンペーンを背景とした「民話ブーム」の時代となり、松谷みよ子が主導した「日本民話の会」を中心に、各地で民話愛好者や郷土研究グループが活発に活動する。昔話が貴重な民俗文化であるという認識が広く共有され、昔話の語りや語り手は文化であると行政も認識し始める。この時期には年間百点以上の昔話資料集が刊行され、昔話研究はピークを迎えた。

しかし一九八〇年代以降、生活の中で昔話を聴いた明治生まれの語り手は減少し、昔話を聴き取ることは難しくなっている。現状では昔話資料集の刊行は、年に数点あるかないかだ。しかもその多くは、常光徹・黒沢せいこ『鳥海山麗のむかし話』（イズミヤ出版、二〇〇九）や、聖和学院短期大学国文科

学生『1976年夏 東北の昔話』（笠間書院、二〇一五）のように、過去の昔話調査の報告である。こうした状況にある中で、『栃木語り』は、現在の語りを収録しつつ、新しい試みに挑んだ昔話資料集であるという点に特色がある。

現在の語りを収めた昔話資料集には、一九一〇年生の佐藤ミヨキさんの貴重な伝承の語りをまとめた、花部英雄『雪国の女語り』（三弥井書店、二〇一四）がある。確かに現在、昔話の聴き取り調査は難しい。しかし、精力的な調査を丹念に続けられ、現在でも語り手と巡り合うことも可能なのだということ、『雪国の女語り』は教えてくれる。現在の語りを収録しているという点だけで『栃木語り』を特別な昔話資料集ということではできない。『栃木語り』は、伝承された口承文芸の資料報告に留まることなく、語りの活動そのものの報告・資料化を通じて語りの現在に向き合い、昔話資料集の可能性を開こうと試みている点において、これまでの昔話資料集と大きく異なっているのである。

間中一代さんは、栃木市で語り活動を精力的に行う語り手である。語り活動とは、学校や高齢者施設、町のイベントや民話語りの会などで昔話の語りを上演する市民活動である。こうした語り活動を行う語り手の語りによる昔話資料集は、たとえば

日本民話の会編「新しい日本の語り」シリーズ(既刊一〇巻、悠書館、二〇一二―二〇一四)などが既に存在する。しかし、そうしたこれまでの昔話資料集は、語り手が受け継いだ伝承の語りそのものに焦点をあて、語り手の現在の語り活動には踏み込まない編集がなされてきた。「栃木語り」はこれまでであえて触れられてこなかった、「活動としての語り」と正面から向き合うことで、現在における語りの意義を問い直そうとしているのである。

『栃木語り』はまず同書の成り立ちとして、語り手の間中一代さんが國學院大學栃木短期大学の口承文芸講座で語った昔話を中心に、地域の語りボランティアでの語りの録音・録画を交えて翻字したものであると、語り活動とのつながりを記す。編者の一人である野村敬子と間中一代さんは、地元紙記者の紹介で、栃木市の市民センターで対面した。そこで間中さんは野村に対して、民話講座で講師に語りたい昔話の主要部分をカットされて思うように語れなかったという経緯を話し、「一体、昔語りとは何でしょう」と問いかける。野村は「栃木で一緒に考えましょうか」と答え、そこから語り活動への参加が始まっていく。ここにいるのはかつての、研究者の聴き取りに応じて昔話を語る受動的な語り手ではなく、昔語りとは何かを自ら探し

求め、研究者に自ら問いかけて積極的に語りを聴き手に届けようとする、能動的な語り手である。『栃木語り』はそうした今日の語り手のありようをまるごと記録し、発信する試みといえる。

『栃木語り』の構成は、野村敬子による「間中一代さんの現代語り」の紹介に続き、「栃木伝説」三十二話、「昔話・世間話」五十七話、そして「活動資料」として活動記録と新たな語り五話を配し、最後に野村と霧林宏道による「研究ノート」二篇が載る。語りにはそれぞれ「間中一代さんのひとこと」が添えられ、伝承の状況や感想、伝説地の現況や土地にまつわる思いのほか、その語りをどのような気持ちで伝えようとしているのか、また聴衆からどんな反応があったのかなど、現代の多様な語りの場を「かつての伝承にはなかったこと」として切り捨てることなく、いま・この出来事として記録している。「間中一代さんの活動は声と言葉をめぐる多くの文化行為を含む振幅の大きなもので、これこそが他の多くの現代語り手にも共通する行動様式と言わなければなりません」(『栃木語り』一三頁)という編者の姿勢を示すものだろう。

また「活動資料」に掲載された「しもつかれの話」には「創作です。」との断り書きがある。栃木の郷土料理「しもつ

かれ」の継承のため、語り手が説話を創造したのである。また「さぎ草原しぎくさのぼらの狸」では、退治される狸がかわいそうという小学生の聴き手の求めに応じて、「狸は入院して命を取りとめる」という「平成版」のバージョンが「ひとこと」に記され、「五匹の鹿の話」には昭和初期の昔話資料の語りなおしである旨が注記されている。こうした語り手の営為は、伝承の語りにおいては記録されない、もしくは捏造として積極的に排除されてきた部分であるだろう。しかし、語りの現場では常にこうした「語りの最適化」がなされているのである。編者らは「先人たちの研究で扱わなかった領分というよりは先の研究者が無視した現代の語りの多様な場面と情熱を再確認すること」（『栃木語り』一一頁）を通じて、現代の地方都市に生きる市民としての語り、「栃木口承市民文芸」をとらえようとしているのだ。

それはおそらく、「いま、昔話を語るとはどういうことか」「栃木という固有の場所を語るいとなみとは何か」を問うことであり、ひいては「語り手と聴き手をひきつける『語りの力』とは何か」という根源的な問いかけを内包しているはずだ。

「積極的な今日的伝承の方法論」（『栃木語り』あとがき）については、編者の一人、野村敬子に『江戸川で聴いた中野ミッツさんの昔語り』（瑞木書房、二〇一一）という成果がある。新

潟県三条市下田で育った語り手・中野ミッツさんが、現住所である東京都江戸川区でふるさとの語りを行う意義を説く同書の問題提起を、『栃木語り』はさらに深化させている。

「現代における語りの意義」を特に強く問うのは、震災避難者を前にしての語りの報告だ。語りの会は行政に断られても何度も避難所に通い、高齢の震災避難者に語りを披露する。慰めとしての語りの力、寄り添う行為としての語りが、そこにはある。伝承の、保存されるべき語りのみの研究から、今日を生きる語りを手助けもする研究へ進むべきだという、編者の立場は鮮明である。『栃木語り』は単なる伝承の昔話資料集としてだけでなく、市民の語り活動の記録でもなく、口承文芸研究そのものの意義を問い直す試みとして読まれるべきなのだ。

（A5判、三〇二頁、瑞木書房、二〇一五年一〇月発行、定価二五〇〇円＋税）

【注】多くの資料集は昔話のみならず、伝説や世間話、民謡や唱えこと等も含んで報告しているが、ここでは便宜的に「昔話資料集」と表記する。